

演題: グループホーム在住の認知症高齢者の口腔機能と要介護度との関連性

演者

○武藤久子¹, 山岸ちか¹, 伊藤美代子¹, 遠山佳乃², 関根佳世², 高井貴久江², 酒井真紀³, 浜島拓也⁴

医療法人社団新聖会 けやき台歯科クリニック

医療法人社団新聖会 高木歯科クリニック

医療法人社団新聖会 元住吉デンタルオフィス

医療法人社団新聖会

発表分類 A: 高齢者

発表分類 B: 口腔ケア

【はじめに】近年、高齢者の口腔機能と健康状態との関連性が指摘されている。本研究では、グループホーム在住の認知症高齢者を対象とし、口腔機能の 1 側面である RSST の実行回数と要介護度との関連性を検討した。

【対象】2013 年 10 月～2014 年 2 月までの期間に埼玉県および神奈川県グループホームに入居していた 1581 名のうち、認知症が認められ、かつ入居後の初回検査時に RSST を実行できた者 619 名とした。

【方法】本研究は観察研究・横断研究であった。歯科医師および歯科衛生士による口腔ケアを週 2 回実施し、口腔ケアおよび口腔機能の指導を実施した。口腔機能の記録は 3 か月に 1 回とし、歯科衛生士が他覚評価を行った。年齢、初回の測定時からの経過日数、初回測定時の RSST 実行回数、および最新の RSST 実行回数を独立変数とし、介護度を従属変数とした重回帰分析を実施した。

【結果】要介護度は 2.41 ± 1.33 、RSST 実行回数は 1.57 ± 1.31 回であった。最新の RSST 実行回数が有意な独立変数であり ($\beta = -0.349, p < 0.001$)、RSST 実行回数が少ないほど介護度が上昇した。

【考察】RSST 実行回数の低下が要介護度の上昇の有意な予測変数であったことから、RSST の維持・改善が介護度抑制に有効である可能性が示唆された。

【結語】本研究の結果、RSST 実行回数と要介護度との関連性を見出した。

(597 字 / 600 字)